

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 5 月 22 日現在

機関番号：14501

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2014

課題番号：23510315

研究課題名(和文)南太平洋における公共圏と親密圏の生成に関する文化人類学的研究

研究課題名(英文)Anthropological Study on the formation of 'public sphere' and 'intimate sphere' in the South Pacific

研究代表者

吉岡 政徳 (Yoshioka, Masanori)

神戸大学・その他の研究科・教授

研究者番号：40128583

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、公共圏や親密圏という近代的な概念が南太平洋の都市においていかなる有様を呈するのかということの解明することを目的としている。南太平洋の都市は、村落と都市の区分を設けるのが難しいところに成立しているゲマインシャフト都市であり、そこでは、社会科学で一般的に想定されている「閉じた村落共同体」と「開かれた公共圏」という二分法では捉えきれない新たな共同体が出現している。それは、互いに異質な者が異質なまま存在することが許されるヘテロトピー状況と、近代的な都市としてのイゾトピー状況が共存する新しい共同体であり、そのことが、従来の公共圏概念などの見直しを迫っている。

研究成果の概要(英文)：This study aimed at elucidating the formation of public sphere and intimate sphere in the South Pacific cities. The city in the South Pacific has been proven to be characterized by the concept of 'Gemeinschaft City' which is constructed by the mixture of village and city. In such a city, there appears a new kind of community which is not grasped by the dichotomy between closed village community and open public sphere generally found in the arguments of social science. There, coexist the heterotopic situation in which each person of different nature is able to be as he/she is and the isotopic one which is caused by the modernity. The fact of the coexistence of heterotopy and isotopy in the same sphere results in the rethinking of conventional concept of public sphere.

研究分野：文化人類学

キーワード：公共圏 親密圏 南太平洋 文化人類学 都市 共同体

1. 研究開始当初の背景

「アジア・太平洋の時代」が叫ばれて久しいが、この標語においては、太平洋地域に関する部分はオーストラリアとニュージーランドが占め、島嶼世界は全くそこから抜け落ちているのが現状である。南太平洋の国々も、弱小最貧国という括りの中で埋没し、とるに足らないところと考えられてきたかのようである。そうした位置づけが、楽園、秘境という我々の世界から隔絶された別世界であるかのようなイメージを与えてきたといえる。しかしグローバル化が成熟した様相をみせる現代、南太平洋の人々の現実の生活においては、インターネットの普及、携帯電話の普及ともあいまって、様々なモノ、価値観が国境を越えて行き交っており、人々はその波の中で現代を生きている。特に、都市部はこうしたグローバル化が顕著に作用するところであり、伝統と近代が交差する独自の都市空間が出来ていると想定される。そうした状況で、西洋近代に特有のものと考えられてきた公共圏、親密圏というものがいかに生成しているのかを考えると、言う着想が生まれた。

ハーバーマスが『公共性の構造転換』で論じて以来、公共圏概念は社会科学の中で絶えず議論されてきた。その中で特に強調されてきたのが、「開かれた公共圏」=近代と「閉じた共同体」=伝統の二分法であり、それは社会科学で広く受け入れられてきた。そしてこの前提に従えば、南太平洋の島嶼地域のように、近代の枠組みから外れいまだに強い共同体の仕組みの中で生きるとみなされてきたところに、公共圏が成立するはずもないということになる。しかしこの前提は二つの点で間違っていると言わざるを得ない。

一つは、グローバル化の浸透を過小評価しているということである。すでに述べたように、最も辺境に位置づけられてきた太平洋の都市においてさえ、世界のあらゆる情報が瞬時に手に入り、世界から多様な人、モノ、価値観が流れ込んでいる。そして、そうした状況にあって、都市は急速に近代の枠組みを取り入れて成熟しつつあり、公共圏というものが都市において生成するものであるとすれば、まさに現代の南太平洋の都市をこそ議論の対象に据えねばならないだろう。

二分法が間違っているという二つ目の点は、共同体をことさら閉じたシステムとして把握してきたことである。文化人類学が明らかにしてきたことは、伝統的と呼ばれる村落共同体でさえ閉じているわけではないということである。ましてや近代の枠組みを含めたグローバルな流れを正面からとらえてきた都市においては、伝統的共同体を自らの都

市文化によって変形させ、しかも、グローバルな流れの中に位置づけるという現象が生み出されているのである。

2. 研究の目的

本研究の目的は、「楽園」「秘境」という我々からは隔絶された世界のイメージでしか語られてこなかった南太平洋において、現代社会に特有とされてきた公共圏や親密圏がグローバル化の進行とともに生成しているかどうかを考え、西洋由来の近代概念が非西洋世界でどのように流用、消費、変形されているのか明らかにすることで、南太平洋地域独自の公共圏、親密圏のあり方を探ることにある。

3. 研究の方法

本研究は4年次にわたるものであり、南太平洋の中でもメラネシア地域に位置するヴァヌアツ共和国の都市でのフィールドワークを中心に展開された。人口30万人弱のヴァヌアツには、コロニアル・タウンとして成立した首都のポートヴィラと、アメリカ軍が第二次大戦中に建設した基地を基盤として成立したキャンプ・タウンとしてのルガンヴィルという二つの都市が存在する。これらの二つの都市でのフィールドワークを基礎に、公共圏や親密圏のあり様を検証してきた。

4. 研究成果

年度ごとに見出した研究の成果は以下のとおりである。

(1)初年度は、ヴァヌアツ共和国の首都、ポートヴィラでフィールドワークを実施した。ヴァヌアツは英仏共同統治という経験をもっており、さまざまなものがイギリス系とフランス系に分かれた形で植民地統治がおこなわれてきた。都市づくりにおいてもそうした対立が反映されているが、首都であるポートヴィラは、コロニアル・タウンとして成立したこともあり、イギリス系とフランス系の対立が直截的に出現しているところであった。しかし現在のポートヴィラでは、伝統的な島の対立、植民地統治によって持ち込まれた対立を超えたところに新たなまとまりが生み出されている。そうした新たなまとまりの中で、宗教的なまとまりは親密圏や公共圏を考える上での起点となる。ヴァヌアツは、ほとんどがプロテスタント、アングリカン、カトリック教徒であったが、近年、モルモン教、エホバの証人、そしてバハイ教などのマイナーな教団が活動を活発に展開している。

これらの宗教活動は、既に成立している大宗教の布教領域を侵食すること展開されるため、内的な領域では家族関係を超えるような強い絆と団結力が存在しており、ある意味で同質的で排他的な空間を共有している。その意味で、まさしく社会科学で規定されてきた親密圏が出現していると言える。そしてこの親密圏は、近代の仕組みで論じられてもものがそのまま適用できるものであり、南太平洋独自のものとして変形が施されたとは考えられないものであった。

ところで、ヴァヌアツの都市部では、アルコール系の伝統的飲料であるカヴァを飲ませる店、いわゆるカヴァ・バーが隆盛を極めているが、西洋世界のカフェが公共圏の起点となったように、メラネシアのカヴァ・バーが、メラネシア的な公共圏へのまとまりを作る出す可能性を今回見出すことができた。問題は、このカヴァ・バーが作り出す空間が、完全に誰にでも開かれているわけではないが、排他的でもないという点であることが判明した。

(2) 第二年度は、ヴァヌアツ共和国第二の都市、ルガンヴィルを中心にフィールドワークを実施した。ルガンヴィルは、アメリカ軍が第二次大戦中に建設した基地を基盤として成立したキャンプ・タウンとしての性質を持っており、コロニアル・タウンとして発展してきた首都のポートヴィラとは異なった都市的様相を呈している。ルガンヴィルでは、アメリカ軍が引き上げてから、メラネシアの人々が居住を始めたため、首都のポートヴィラと比べると、はるかにメラネシアン・タウンとしての様相を呈している。島単位の住み分けもポートヴィラよりも強く、より共同体の仕組みが村落に近い形で存続しているように見えるが、そこにグローバルな波が入り込むことにより、都市空間の在り方は劇的に変貌を遂げている。初年度の段階でカヴァ・バーが作り出す公共圏のあり方に注目する必要がある点を見出したが、ルガンヴィルでもそうした側面から調査を行った。同じ島の出身者が経営するバーに人々が集まる傾向が強いため、互いのひそやかな経験を共有する側面があるとともに、他の島の出身者に対しても決して排他的にならず、いわば、異なる出身の者同士が、異なったまま共存を許す状況を作り出していることが分かった。さらに、携帯電話の圧倒的な普及で、出身の島の住人と瞬時に連絡が取れるようになったため、都市的な状況と村落的な状況が極めて密に共有されるような状況が出現している。そして、カヴァ・バーにおけるこうした半公共的な空間が、さらに、出身の村落である「共同体」と連携することで、メラネシア的な空間構成が行われていることが見えてきた。

(3) 第三年度の研究は、本研究全体のターニングポイントとなるものとなった。それまで、首都ポートヴィラや地方都市ルガンヴィルにおけるカヴァ・バーなどが作り出す空間に着目して、それなりのメラネシア的な状況を把握することができた。しかし、本年度は、これら都市在住の人々と彼らの故郷の人々とのあいだに存在する回廊を調査することで、新たな発見があった。それは、村落と都市の二分法が理論的に崩れているというだけでなく、南太平洋の都市において両者が現実には混淆した状態を作り出しているということである。

対象としたのは、ポートヴィラ在住のペンテコスト島北部の人々と彼らの故郷の人々の間に設定される回廊である。首都に集う人々が作り出す空間などを中心に調査を行ったが、彼らの故郷となるペンテコスト島北部との回廊を明確に把握するため、本年度はペンテコスト島北部でのフィールドワークも実施した。前年の調査で、携帯電話の圧倒的な普及で、出身の島の住人と瞬時に連絡が取れるようになったことを指摘したが、確かに都市部と村落部の差異は急激になくなりつつある現実をみることもできた。つまり、かつては都市部に村落部の様式を持ちこむことで「伝統」を変形させつつも村落との回廊を保っていたが、近年は、そうした変形された伝統が逆に村落部に持ち込まれることで、村落部が都市化し、両者が混淆した状態の文化が生み出されているといえる。

つまり南太平洋の都市は、村落と混淆した状況を呈しているが、そこにみられる共同体は、社会科学で論じられてきた「閉じた村落共同体」とは異なっているだけではなく、文化人類学的研究が明らかにしてきた「開かれた村落共同体」とも異なったものであることが分かった。文化人類学で言う「開かれた村落共同体」は、確かに村落で見いだせる。しかし、それは、異人を同化することで共同体の成員へと組み込むという仕組みが働くゆえに「開かれている」と言える。しかし、同化させることで同質のまとまりを作り出すという点では、結局、異質なものを許す仕組みが働いているわけではないので、その意味では「閉じている」ともいえる。一方、都市において作り出される同郷者の共同体は、こうした村落共同体と同じく伝統的慣習が支配する世界である。しかし、都市を貫く近代の論理からのがれることはできない。つまり、ある島の出身者がつくる共同体は、別の島がつくる共同体と、都市生活をするうえでの「都市らしさ」によって関連を持たざるを得ず、異なる共同体が互いに存在することを認めざるを得ない状況になるのである。つまり、異なるものが存在することを許容するとい

う精神が、これら都市における共同体にも見出されるのである。そして、こうした異なる共同体の成員がカフェ・バーにおいて作り出す空間は、自分たちの内部で固まるという点で「閉じた村落共同体」のようになると同時に、異なる共同体の存在を許容するという点で、「公共圏」のような空間にもなるのである。

(4) 最終年度は、今度は再度地方都市のルガンヴィルを訪れた。そして、そこにおける地方との回廊を中心に調査を行い、ペンテコスト島との回廊によって生み出される新たな共同体のあり方を探りだした。その結果見いだされたことは、南太平洋の都市は、村落と都市の二分法を乗り越えた「ゲマインシャフト都市」と名づけることができるような性質をもっているということであった。ポートヴィラでもルガンヴィルでも、私的な生活では、同じ島の出身者は互いが「村落共同体」を構成するように何らかの棲み分けをして生活している。その内部では、各島の伝統的な慣習が規律として流通する。しかしこれらの共同体は、決して排他的なまとまりを作り出すのではなく、開かれた村落共同体を構成しており、互いに異質なものとして認めながら、異質なもの同士の共存が実現している。一方で、都市としては一つのまとまりを作り出している。それは、公的な場面に見られるものであり、人々はそこでは近代の原理、規律に従った生活が送られている。というのも、南太平洋の都市は、まさしく、近代によって作られたものであり、西洋世界への窓口として機能してきたからである。つまり、ゲマインシャフト都市では、私的な空間では異質なものが異質のまま共存するようなヘテロトピーに満ちた生活が送られる一方、公的な空間では、西洋近代の原則に従って人々はまとまった同質なイゾトピーに満ちた生活をおくっているのである。

この様なゲマインシャフト都市において出現する共同体は、ヘテロトピーとイゾトピーが共存するものであり、従来の共同体概念では捉える事の出来ないものとなっている。そこで参照されるべきは、ナンシーの言う「無為の共同体」、あるいはリングスの言う「何も共有していない者たちの共同体」など、「もう一つ別の共同体」である。フィールドデータが示している南太平洋の都市の在り方は、まさしくこうした意味での「もう一つ別の共同体」であり、それは、村落共同体でも公共圏でもない「共同圏」とでも呼べる空間を示しているのである。

近代概念としての親密圏は、まさしく南太平洋の都市において出現しているが、公共圏は出現しているとは言い難い。しかし、それが南太平洋的な変形を加えることで、「共同

圏」として成立しているというのが、本研究の結論である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 4 件)

吉岡政徳 "The Story of Raga: A Man's Ethnography on His Own Society(VI) Rank-taking Ritual". 『国際文化学研究』 40:73-142. 2013

吉岡政徳 "The Story of Raga: A Man's Ethnography on His Own Society (V): The Gaibwalasi and Haroroagamali Rituals." 『近代』 108:31-86. 2013

吉岡政徳 「オセアニアにおける公共圏、親密圏の出現」柄木田康之、須藤健一編 『オセアニアと公共圏：フィールドワークから見た重層性』昭和堂、pp.205-222. 2012

吉岡政徳 「単なる「出身」、それとも「エスニシティ」？ - ヴァヌアツ・ルガンヴィル市におけるマン・プレス概念」須藤健一編 『グローカリゼーションとオセアニアの人類学』風響社、pp.23-50. 2012

〔学会発表〕(計 0 件)

〔図書〕(計 3 件)

吉岡政徳 『ゲマインシャフト都市：南太平洋の都市人類学』風響社、in print

吉岡政徳 『南太平洋の都市を歩く：人類学的フィールドワークの現場から』神戸大学大学院国際文化学研究科、2015

The Story of Raga-David Tevimule's Ethnography on His Own Society, North Raga of Vanuatu The Japanese Society for Oceanic Studies Monograph Series Vol.1, The Japanese Society for Oceanic Studies. 2013

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：

発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等
<http://web.cla.kobe-u.ac.jp/staff/yoshioka/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

吉岡 政徳 (YOSHIOKA, Masanori)
神戸大学・大学院国際文化科学研究科・教授
研究者番号：40128583

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：